

聖書論論争をめぐる視点からの個人的所見

村瀬俊夫

I

日本福音主義神学会の設立に参加した者たちの一人として、今はその役を終えたものと思い数年前に会員から退いているが、同会の歩みが40年を重ねたことに感慨を覚えている。1969年秋に同会の設立を呼びかけたのは、日本プロテスタント聖書信仰同盟（JPC）に属する6名（泉田昭、宇田進、今野幸蔵、斉藤孝志、榊原康夫、村瀬俊夫）である。そして1970年4月に日本福音主義神学会が設立されたのであるが、呼びかけ人たちの背景からも明らかなように、同会は当初から聖書信仰運動の学問的深化および展開として福音主義神学の形成をめざしていた。その根底にあったのは、聖書の十全靈感を根拠に「聖書は誤りなき神のことばである」と主張する信仰的立場の学問的解明ならびに論証を重視する姿勢である。

このたび同会を退いている私に、設立時の呼びかけ人の一人であったということで、「日本福音主義神学会40年の歩みを顧みて」を特集テーマとする『福音主義神学』第41号に一文を寄せるようにとの依頼があった。ためらう気持ちが大きいがあったが、この機会に歴史の証人の一人として個人的所見を述べるのが許されるなら、そうしてみるのもよいのではないかという思いのほうが強くなって執筆を引き受けた次第である。

私は1929年生まれであり、敗戦を迎えたのは16歳である。それまでキリスト教とは全く無縁の境遇にいたので、敗戦のような驚天動地の出来事がなかつ

たら私がキリスト者になることなどあり得なかったであろう。戦後3年目(1948年)に、不思議な導きで家庭集會に誘われて聖書のお話を聴き、また最初期のK G K (キリスト者学生会)の伝道集會で説教を聴いた。前者では聖書のお話はよく分からなかったが、講師の先生の謙遜な態度に深く心を打たれた。お偉い先生がどうしてこんなに謙虚にふるまわれるのか。それまで私が接する機会があった坊さんたちと比べて、そのことが強く印象づけられたのである。後者では講師の先生の人柄よりも説教の内容に強く引き付けられた。それは純然たる教理的説教であり、神について、人間の罪について、そして罪からの救いについて噛んで含めるように理路整然と話されることに、私は不思議に吸い込まれた。神道や仏教で漠然たる宗教心を養われていたので、このように理路整然と語られる信仰の内容に圧倒されたのである。その結果、唯一の聖にして義なる神の御前に自分が罪人であることを素直に認め、私を罪から救ってくださる方としてキリストを信じたいと心から願うようになった。

そのようにして私はキリスト者となり、1年半余の教会生活を経て神学校に入り、やがてはキリスト教の伝道者となる道を選んだ。若気の至りであったかもしれないが、これも神の摂理であったと思わざるを得ない。毎週の礼拝説教を乾いた地が水を吸い込むように聴き、聖書を熱心に読んで新約聖書の多くの部分を〔リズムのある文語訳のおかげで〕そらんじるまでになっていた。それで神学校の入学試験で聖書に関しては満点であったことを覚えている。神学校では勉強がきつくて聖書を読む時間が著しく割かれる感じだったので、入学以前に聖書をよく読んでおいたことがどれほど助けとなったか分からない。

神学校では知的な訓練が中心で、聖書や神学についてのたくさんの知識を詰め込まれ、聖書語学(ギリシア語とヘブル語)の学習に多くの時間を割かざるを得なかった。不思議にギリシア語の学習は楽しく、その関連で新約聖書についての学びへの関心が高まった。その学びの成果を生かす機会に私は若くして(30歳代半ば頃に)めぐり会えた。聖書協会発行の口語訳聖書とは別に、「聖書信仰の立場」(注・これについては項を改めてJ P Cの誕生とともに論じる)を鮮明にした新しい聖書の翻訳事業が1960年代に始まり、その新約の部に翻訳者の一人として、さらに翻訳主任の松尾武を助けるリサーチャーとして携わることになった(1963-65年)。1965年11月に新改訳聖書の新約の部が完成し刊

行された(旧約の部の翻訳が完成し刊行されたのは1969年である)。この訳業に参加することで、新約聖書の原典であるギリシア語本文を現在知られている諸写本から確定していく本文批評の実際に触れることができた。それで私が肌で感じたことは、新約聖書の本文確定のために批評作業が必須であること、しかしそれによって絶対的な本文に限りなく近づけたとしても絶対的な本文を確定することは不可能であること——この二点である。さらに身に滲みて感じさせられたのは、原典のギリシア語を日本語に翻訳するに際し、確定された本文についての歴史的・文化的背景や脈絡といった問題を明らかにする作業の重要性についてである。それは聖書の歴史批評的研究であるが、その必要性を私は聖書翻訳作業の中で否応なしに身につけさせられたのではないと思う。

旧約と新約を合わせた新改訳聖書の完成と刊行を機に、この新改訳聖書の訳文に基づく聖書注解書刊行の企画が持ち上がったのは、当然の時の勢いである。その企画が〔新改訳聖書の刊行で中心的役割を果たした〕いのちのことば社で進められたのは、日本福音主義神学会が設立されて間もない頃に当たる。日本福音主義神学会の設立に促されて『新聖書注解』刊行の企画が実現へと向かうようになった、と見ることもできるであろう。『新聖書注解』は最初に新約の部を全3巻で刊行することになり、3名の常任編集委員の一人として私が関わることになったのは40歳代前半の時期である(なお執筆者は全員、新改訳聖書の訳業に参加した方々や福音主義神学会の会員であった)。この仕事に私は精魂を傾けて当たり、第3巻(1972年9月)、第2巻(1973年5月)、第1巻(1973年11月)の順で刊行することができた。

常任編集委員による「刊行のことば」は、この注解書の特色として、第一に〔福音派陣営における〕日本人のみの執筆者の書き下ろしであることを述べた後、次のように記している。「この注解書の第二の特色は、たいへん欲張ったことであるが、最新の聖書学の成果を聖書信仰の立場から十分にくみ取りつつ、しかも信徒のかたがたに親しんで読んでいただける注解をめざしたことである。今日的状況において福音の真理を明確にするために、適度の批評的な問題を扱っている。学問的な方法と信仰的な情熱とが調和を保つように、各執筆者は最善の努力を傾けたつもりである」と。なお全3巻の刊行を終えることとなった第1巻の〔編集委員一同による〕「あとがき」に、次のように記した一文がある。

「ここに主の導きによって完成を見た『新聖書注解』(新約)」が、特に聖書信仰(聖書は誤りなき神のことばであり、信仰と生活の唯一・絶対の基準であると告白する信仰)に立つ日本の福音的諸教会において用いられ、いっそうの福音の理解と前進、ならびに教会の成長に役立つことを通して、主の御名があがめられることを、せつに願ってやみません。」

II

私にとっての二つのキー・ワードは、「聖書信仰の立場」と「適度の批評的な問題」である。前者に関わる「聖書信仰」という用語は、私の意識では1959年になって知ったものである。その年に日本プロテスタント宣教100年を記念し、改革派を含む福音派の諸教会・諸団体が協力して「宣教100年記念聖書信仰運動」を全国的に展開した。翌1960年には、この運動を一過性のものとして終わらせないための継続的組織として、「日本プロテスタント聖書信仰同盟」(英語のJapan Protestant Conferenceの頭文字をとってJPCと呼ばれる)が誕生した。「聖書信仰」という語は英語の名称にはなく日本語の名称にだけ付けされている。それだけ日本の福音派に「聖書信仰」を意識し強調したい思いが強かった、という証左であると思う。

この「聖書信仰」という表現に、私はなかなか馴染めなかった。今も何かしらしっくりしないものを感じているので、自ら進んで「聖書信仰」を口にすることはしない。上述のJPCに1964年頃には自覚的に身を投じており、同年2月に開かれた第5回全国協議会に参加、月刊機関紙『聖書信仰』の編集部の一員に加えられた。そして早速『聖書信仰』43号(1964年4月)の第1面に「エキュメニカル運動について——その必然性と問題性」と題する一文を寄せている。同号には第5回全国協議会で語られた岡田稔(神戸改革派神学校校長)の「エキュメニカル運動とJPC」と題する講演要旨が掲載されているが、私の一文はそれに触発されたものであろう。このようにJPCの組織の一員として活動する中で、私もJPCが主張する「聖書は十全靈感による誤りなき神のことばであり、信仰と生活の唯一無謬の規準であると信じる」という立場で「聖書信仰」を受け止め、それを口に、真正面から取り上げて文章を書くように

なった。『聖書信仰』68号(1966年6月)には、「聖書信仰の吟味と反省——『靈感された言語』の絶対性について」と題する一文を寄せている。この一文に、当時37歳であった私の問題意識がよく示されている。

ここで私が「聖書信仰」という用語について抱いていた違和感について述べておきたい。「聖書信仰」という語感から私が受ける第一印象として、「福音信仰」や「キリスト信仰」と言うときと同じように、すなわち、福音もキリストも信仰の対象であるように、聖書が信仰の対象となるという意味合いが先行してしまう。私にとって、聖書は尊敬の対象であっても、決して信仰の対象ではない。聖書に示されている福音もしくはキリストこそ私の信仰の対象であるが、聖書そのものは決して私の信仰の対象ではない。そういうことで私自身は、JPCの組織の一員として活動するときは別として、個人として聖書信仰という言葉を使用することには極めて消極的であった。その証拠に、私がJPCの責任ある一員(実行委員ならびに「聖書信仰」編集委員会委員長)として活動し始めた時期と並行する1968年から1971年にかけて、当時ののちのことば社から「信仰良書選」シリーズとして刊行された私の4冊の著書には、一度も「聖書信仰」という用語が使われていない。それらの著書を発行順に列挙すれば、『聖書は何を教えているか——聖書教理入門』(1968年)、『門をたたけ——キリスト教入門』(1968年)、『キリスト者の生活——信仰生活入門』(1970年)、『聖書の中心的な流れ』(1971年)である。第4冊目に副題を付けるとすれば「聖書神学入門」である。

しかし、ほとんど同時期に、私はJPCの責任ある一員として、「聖書信仰」をJPC規約の定義の通りに受け入れ、聖書信仰を神学的・実践的に掘り下げ、また展開するための出版事業に深く関わっていた。先に言及した『聖書信仰』68号(1966年6月)に掲載の一文「聖書信仰の吟味と反省——『靈感された言語』の絶対性について」には、聖書信仰についての私の神学的思索の一端としての問題意識が吐露されている。「聖書は誤りなき神のことばである」という主張は、書かれた聖書の言語が〔部分的にではなく〕十全に(すなわち、全部)靈感されているという十全靈感説に支えられている。すると、十全に靈感された言語とは、どういう言語なのか。考えられるのは「絶対的な意味をもつ、不可謬である言語」という概念である。しかし、そんな概念の言語を歴史的次元にお

ける文化的現象の中に求めるのは、〔すべて歴史的なものは相対的であることを免れないのであるから〕不可能である。そこで私が注目したのは、歴史の中で「終末論的出来事」として生起する神の歴史的啓示についてである。この神の歴史的啓示のクライマックスに、イエス・キリストの〔受肉、生と死と復活によって実現した〕救済の出来事がある。そして、この終末論的出来事を伝達する手段となる聖書の言語も、靈感という聖霊の働きを介して「終末論的言語」とされ、神の啓示の目的に合致しての絶対性と不可謬性が保障される〔と私は考えたし、今もそのように考えている〕。その意味で、「聖書は〔キリスト者にとって〕信仰と生活の唯一無謬の規準である」と告白することができる。1969年にJPCの最初の刊行物として『現代と聖書信仰』と題する論集（羽鳥明・村瀬俊夫・泉田昭編）が、いのちのことば社から発行された。それに私が寄せた「聖書信仰の神学」と題する論稿に、以上の私の考えがかなり系統的に述べられている。

その終わりのほうで（『現代と聖書信仰』58-59頁）、以下のように述べている。

＜聖書が徹頭徹尾「神のことば」であるということは、あくまで救済史的基盤に立って有機的に考察され、受け取られなければならない。そのことから、聖書の十全靈感は、それを質的な面から考察すれば「有機的靈感」と呼ばれるであろう。「神のことば」としての聖書は、全体が有機的一体を保つように靈感されているのであるから。＞

＜歴史的・文化的性格を帯びた人間の言語は、その意味内容において、いつも流動的・相対的なものであることをまぬがれない。それゆえ、靈感された言語の絶対性・不変性を客観的に保証するところのものは、単なる歴史的・文化的次元のうちではなく、救済史における終末論的観点において認められるのである。その意味において、靈感された言語とは、歴史的・文化的次元の中で終末を先取りしている「終末論的性格の言語」であると言える。＞

＜靈感された言語は、聖霊の働きと不可分の関係にある。靈感された言語の終末論的性格——その絶対性と不可謬性——を保証し、それを私たちに確信させてくれるものは、聖書を通して働かれる聖霊の導きにほかならな

い。この聖霊の導きは、靈感の事実とは区別して「聖霊の内的なあかし」あるいは「聖霊の照明」と呼ばれている。「聖書は誤りなき神のことばである」という主張は、聖書を通して働かれる聖霊の導きによらなければ、だれも告白することのできない信仰的真理なのである。＞

III

孔子は「三十にして立つ。四十にして惑わず」（『論語』為政第二）と言ったが、そのように私も30代半ばで聖書論に関する神学的思索で終末論的視点に立つことを知り、40歳の頃には私なりの「聖書信仰の神学」を不惑のものとして確立していたことになる。それから40年を経て私は孔子より長生きしているが、聖書論に関する基本的な立場は少しも変わっていない。そう言い切ってしまうと、聖書論あるいは聖書信仰をめぐる神学的思索において私の進歩と成長が止まってしまったように思われるかもしれない。もちろんそんなことはなく、私なりの進歩と成長を遂げ今日に至っている。そのために私は、聖書の歴史批評的研究（聖書批評学）と密接に関わる聖書神学に深く関心を寄せるようになっていた。それで『現代と聖書信仰』に次ぐJPCの刊行物の第二弾として翌1970年に出版された『なぜ聖書信仰が必要か——神学／教会／倫理』（葛田二雄・石丸新・村瀬俊夫編、いのちのことば社発行）に、私は「聖書信仰と聖書神学」と題する論稿を寄せている。その意図が次のように記されている。

＜再び与えられたこの機会に、最近の聖書神学の成果が、どのようにJPCが主張する聖書信仰の理解にかかわり、また積極的に貢献しているかについて、少しばかり思想史的な考察を加えながら、私なりに書いてみたい。そうすることによって、現代の神学的状況にふさわしい新鮮な聖書信仰の理解が与えられるなら、これからのJPCの健全な成長と発展に大いに役立つと信じるからである。＞（45頁）。

この「聖書信仰と聖書神学」と題する論稿は、私の「聖書信仰の神学」が受肉化されたものと言ってもよく、その神学的思索の発展線上に今もあることは間違いない。このように私を導いてくれた神学的先達として、私とその著書や論文から多く教えられた方の名を挙げるなら、まずオスカー・クルマンである。